

コリント人への手紙第二2章14節 「キリストの凱旋式」

1A 敗北のように見える道筋

1B アジアでの苦難

2B 悲しませる訪問と手紙

3B テトスに会えない気落ち

2A 凱旋の行列 14

1B 王なる將軍

2B キリストの捕虜

3B キリストの知識の香り

本文

コリント人への第二の手紙2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、先週から第二コリントに入りましたが、今日は午後礼拝で2章を一節ずつ見ていきます。今朝は、2章14節に注目します。「¹⁴しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちがキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。」キリストによる凱旋の行列と、パウロは言っています。凱旋の行列とは何か？ 私たちには、なじみのないものです。しかし、ローマ帝国に住む人々には、非常になじみのある行事です。凱旋式といいますが、外国を征服した將軍が、まるで王位を得たかのように、戦車に乗って行列をし、ローマの神々の神殿に略奪物を献げる祝祭です。この凱旋式については、また詳しくご説明しますが、パウロは、キリストをあたかもその王たる將軍のようにして、自分がその行列に連なる者として形容しています。

1A 敗北のように見える道筋

凱旋という言葉ですが、以前の訳ですと、勝利と訳されています。キリスト者が、また福音を伝える宣教者が、勝利をすると聞けば、どのようなことを思うでしょうか？ 病の人と、健康な人ではどちらが勝利に感じますか？ 病よりは健康のほうが、勝利している人に見えますね。貧しい人と、経済的に安定した人と、どちらが勝利しているように見えるでしょうか？ 経済的に安定していたことにこしたことがないですね。人々に好かれているほうが、勝利していますか？ それとも、憎む人々が多くなったら勝利していますか？ 憎まれるより、好かれる方がいいに決まっていますね。福音に回答しない人たちがいるのと、すべての人が福音を信じました、としたら、どちらが成功した、勝利した宣教者でしょうか？ そりゃあ、すべての人を神は救いたいと願われていますから、すべての人をキリストに導いた人のほうが勝利していると思えますね。

このように「勝利」という言葉のともなうイメージがありますが、パウロがこの言葉を使った背景を思い出すと、私たちは非常に驚くわけです。

1B アジアでの苦難

パウロは、1章で、自分自身が死の覚悟をしなればいけないほど、アジアにおいて苦難を受けました。おそらく、エペソの劇場での大騒動に巻き込まれたことを話していると思いますが、そこで、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受けました。

2B 悲しませる訪問と手紙

そして、パウロは、2章から、コリントの教会で近親相姦の罪を犯している男を裁きなさいという指導とし、手紙を出したであろうことが書かれています。罪を犯している人がいて、その人をそのままに教会がしていたのですが、それに対して使徒の権威を行使して、彼をサタンに引き渡すようなことをパウロはしたのです。それは、彼は「大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに」手紙を書いたと言っていて(2:4)、彼にとっては苦渋の決断だったのです。

3B テスに会えない気落ち

パウロは、その手紙をテスに託したのだと思います。テスに先に行かせて、パウロは、トロアスに旅立ちました。トロアスでテスに落ちあうことになっていました。そこで福音を伝えていましたが、一向にテスはやってきませんでした。彼は気落ちしていました。その思いで、船出をしてマケドニアに行きました。

死、悲しみ、気落ちなど、恐れや不安、嘆き、落胆など、人の弱さをいっぱい持ち合わせている時に、パウロは何と、14節を書いたのです。「**神はいつでも、私たちがキリストによる凱旋の行列に加え**」たと言ったのです。どうして、これらのことが勝利なのでしょう？

よくよく、考えてみてください。私たちが物事を見る時に、どこを見るかでまるで見方が変わります。コップに半分の水が入っているのを、「半分しか水が入っていない」と見るか、「半分も水が入っている」と見るかで、大きく変わりますね。パウロは、多くの負に思える経験を、その福音宣教の働きの中でしてきましたが、しかし、その弱さの中であって、主が福音の働きを進ませてくださいているのを認めました。いや、むしろ弱かったからこそ、そこにキリストが支配され、凱旋しておられるのに気づいたのです。

エペソにおいて大きな騒動が起きました。それでエペソを出て行かなければいけませんでした。パウロは現にこのように生きています。つまり、死ぬようなところで、死者を生き返らせることのできる神により頼み、それでキリストの復活のいのちがそこに現れたのです。自分としては実に惨めで、トラウマ的な出来事でありましたが、しかし、死んでおかしくなかったのに、神が生かしておられるという証しをすることができたのです。

そして、近親相姦の罪を犯している男についてですが、パウロの涙ながらの手紙に正しく応答し

て、彼は悔い改めたことが 2 章に書かれています。厳しい対処をしなければいけなかったのですが、しかし、罪を悔い改め、人々が赦すことができるまで導くことができました。そして、テトスについてのことも、トロアスでは会えませんでした。マケドニアでテトスに会って、今、話した、人々が正しくパウロの厳しい指導に回答した良い知らせを受けたのです。自分は、死を意識して恐れおののいて、愛する人々を苦しませるような手紙を書き、テトスに会えないという気落ちの中にいたのに、自分はまったく勝利していないのに、キリストは勝利の足跡を残してくださっているのです。自分は敗北の道を歩んでいると感じているその時に、キリストは凱旋の行列をなして、歩いておられることに気づいたのです。

2A 凱旋の行列 14

ですから、パウロは、自分に対しては全く誇ることができませんでした。おそらく内側は敗北感でいっぱいでした。ところが、キリストが働いてくださっている。その関係を上手に表しているのが、ローマ帝国に住む人々の誰もが知っている、凱旋式の中によく表れていたのです。あたかも王位を受けたかのように、外国の敵を征服した将軍が凱旋し、その行列に、征服した敵を鎖でつなぎ、捕虜として連れて来ています。パウロは、自分自身はまるで、キリストに征服され、捕虜として生きている、キリストの奴隷のように描いています。しかし、実際の凱旋式と違って、屈辱に満ちている捕虜、奴隷の姿ではなく、自発的に奴隷となり、そのキリストの凱旋をそばにいて、一緒に見物できる恵みにあずかっている、ということです。

カルバリーチャペルの働きが始まったのに、チャック・スミス牧師が用いられました。彼は、自分の成功話について、とても客観的に話します。いや他人事のように話します。むしろ、失敗した話は多くします。自分にとっては失敗のほうがもっと身近なのです。そして自分のことは、「神のすばらしいお働きを見ている見物人だ」と言っています。この関係です、凱旋する将軍キリストと、捕虜として連れて来られた福音宣教者との関係です。

1B 王なる将軍

ローマには、凱旋式という祝典がありました。外国の地を征服した将軍が、ローマに戻ってきた時に行います。将軍はその日は王のような存在であり、神聖なものとされました。将軍の頭の上には、月桂樹の冠があります。かぶせるのではなく、公的な奴隷が頭の上に掲げるという感じですが、四頭の白馬が引っ張る戦車に乗ります。



そして、非武装した兵士も行進の中で付いて行きます。その将軍の前には、敵軍の指導者や捕虜が歩いてきます。彼らは鎖につながれていて、その中で処刑されたり、さらし者にされたりします。そして、分捕り物が続きます。武器や金銀、彫像などです。または、象やキリンなど、エキゾチックな宝物も続きます。絵画や模型などもあります。ローマがエルサレムを倒した時に、凱旋式で、メノラすなわち燭台を運んでいる姿が、ローマの凱旋門のところに刻み込まれていますね。これも、凱旋式で行ったことでした。そして、将軍本人がやってきて、その周り、また後ろにローマ兵たちがついてきています。そして、牡牛も行列の中に加わっています。なぜかという、この行列の最終地は、ユピテルというローマの神の神殿だからです。そこで、ローマ神に対して献げ物をしたのです。

パウロは、ローマに生きている人であればだれもが知っている、この凱旋式を使って、キリストが霊の勢力を征服させて、凱旋している姿を描き出しているのです。たとえ、自分が惨めな思いをしていても、主は、確かに福音の働きを前進させてくださっているのを目の当たりにして、そのように形容しました。コロサイ書には、キリストが十字架と復活の御業によって、悪の勢力をさらし者にしている姿を、このように表現しています。「コロ 2:14-15 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」キリストは、私たちのために戦って下さり、将軍となってください、また王となってくださいました。

2B キリストの捕虜

そこで、パウロ自身、使徒たちはどこにいるのでしょうか？「**私たちがキリストによる凱旋の行列に加え**」てくださった、とあります。パウロは、その行列に加わっている捕虜、捕らえられた者のようにしているのです。しかし、強いられて捕らえられているのではなく、パウロの場合は、自発的にキリストに捕らえられたものとなったのですが、ピレモンへの手紙で、こんなあいさつをしています。「23 キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。」キリスト・イエスにある囚人であると、パウロは言っています。彼は主に捕らえられ、この方に従っている奴隷なのです。そして、コリント第一では、自分のような使徒たちが、見せ物になっていることを話しています。「4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」

いかがでしょうか？パウロは、なんと自分が征服された捕虜であるが、それは栄誉なことであり、キリストの凱旋を目の当たりにできているのだと誇っているのです。彼は、肉によれば惨めな姿でした。しかし、キリストのゆえに多くの苦しみを受けました。しかし、そのような惨めな思いになっても、キリストは自分を捕らえていて、凱旋の行列に加えてくださって、福音の勝利を目の当たりにさせていただいていると言っているのです。このように、惨めなように見えて、それであって勝利

していることを、4章でこう言っています。「4:8-10 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」

私たちも、どうしても自分は敗北していると感じてしまいます。キリスト者として、果たして自分ができているのだろうか？それは、四方八方苦しめられていることだけ見つけているからです。けれども、よ〜く観察すれば、窮していないのです。そして、途方に暮れていることだけを見たら、敗北しているように見えます。けれども、行き詰まっていないのです。迫害されているのだけ見たら、敗北しているように見えます。けれども、見捨てられることがないのです。倒されても、滅びません。これは、イエス様の死を身に帯びているからであり、なぜイエス様の死を身に帯びているかという、復活の原理、イエス様のいのちが自分を通して現れるためです。ですから、自分が弱くされているのは、自分が弱いとか、敗れていることではなく、神がそのようにされて、私たちからイエス様が生きて働かれているのを、人々に知らせるためなのです。

私が初めて、説教をし始めた時に、意外なことを教会の人に言われました。ほめられたことがあるのです。それは説教の内容ではなく、私が気づかなかったこと、いや、むしろ負い目に感じていたことです。会社に入社して、そこでもまれていることでした。それであっても、なおのことイエス様に従おうとしているということでした。私は、自分がいかに情けない人間なのか？とっていました。打ちのめされていました。会社では、全然、証しになっていないとっていました。けれども、そうやってもがいている私に、キリストがついておられるのを見ることができたそうです。

3B キリストの知識の香り

そして、14節の後半には、「**私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってください。**」とっています。これも凱旋式の一部にある光景から来ています。ローマの神々に対する凱旋なので、香を焚きます。行列から香が放たれているのですが、パウロは、キリストの凱旋において、キリストを知る香りを、放っているようにさせていると言っています。

キリストの知識の香りを放つ、というのは、どういうことでしょうか？前後関係を見ますと、それは、キリストの福音を伝えるということです。12節で、「私がキリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いておられました」ということです。福音を伝えている中で、彼はトロアスに会えず、心に安らぎを失ってしまいました。そのような不安な中でも、彼は主が言われていることを行っていったのです。主の働きをしている中で、心が不安になったり、落ち込んだり、体を弱くすることもあるかもしれません。しかし、その語っていることと、その生きていることが合致していくのです。つまり、パウロは、イエスが私たちの罪のために死んでくださって、葬られて、三日目によみがえらえたことを宣べ伝えていました。しかしそれだけでなく、自分の生きざまに、

イエスの死が現れ、イエスのよみがえりが現れるのです。この人は、自分が弱くされている。自分に死んでいる。しかしイエスが生きているのが見える。この人が語っているイエスは、確かに生きているのかもしれない、と思うのです。

私たちは、福音を伝えることを、言葉で語ることだけに集中してしまいます。もちろん、言葉で書いて、それを信じて、人は救われます。しかし、言葉だけではなく、力があり、御霊の現われがあって、初めて人はキリストを知り、救われるのです。自分のことばに、自分に生き方の裏付けがあって、初めて力を持ちます。それで、自分の生活では、自分自身が思いっきり生きています、ということであればどうでしょうか？イエス様が、聞いている人にとっては、自分にいのちを与えるのではなく、自分からいのちを奪い取っていく人なのではないか？と思うわけです。自分中心に生きている人が、イエス様を伝えているのを見たならば、イエスはわがままな生活を許すマスコットみたいな存在なのかな？とか、人々は思うことでしょう。自分の生活に、イエスの死とよみがえりがあってこそ、自分の語る福音に力があるのです。

ある人から聞きましたが、ユダヤ人の人たちは教会の十字架を見る時に、恐怖を覚えるとのことでした。私たち日本人ならば、ネックレスや、洋風の建物の上に掲げているものであったり、欧米的なものを感じるのではないのでしょうか？しかし、ユダヤ人は違います。恐怖を感じるそうです。それは、何百年も、欧州のキリスト教会は、ユダヤ人に強制改宗を行っていたからです。つまり、洗礼を受けなければ今は生きる価値はない。そうして拷問したり、殺したりしていったのです。昔、日本のキリシタンは、隠れながら仏教徒のふりをしてキリストへの信仰を抱いて行きましたが、ユダヤ人の中には、キリスト教徒のふりをして、隠れユダヤ教徒であった人々もいます。神の愛が示されている、いのちを捨てて、私たちに与えてくださるところのキリストの十字架が、自分の命を取るかもしれない姿になっているのです。

そして、15 節にも少し触れます。「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。」今は、人々に放たれるキリスト知識の香りをパウロは話しましたが、ローマの凱旋式でも、究極的にはその香は、ローマの神々に献げられるものなのです。同じように、聖書には、様々ないけにえについての教えがあります。全焼のいけにえ、穀物のささげ物、和解のためのいけにえなどです。これらは、すべて主の前で芳しい香りとして、受け入れられます。人々にキリストの香りを放つのですが、それが可能なのは、自分自身が主の前に献げている、というところで放たれるのです。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

主を第一にする、主を主としていく中で、キリストの香りが他の人々に放たれます。その生きざまが、たとえ言葉で伝えていなかったとしても、実質的には伝えているのです。香りとして放たれるか

らです。けれども、自分自身はあくまでも、主に自分自身をささげており、それが周囲にも香りが鼻垂れています。しばしば、私たちはこの順番を間違ってしまう。イエスを伝えたいと願って、神に献げる自分を見せるのではなく、自分自身があたかも人を救うかのように、自分がその人にいろいろしてあげたら、その人がイエスに興味を持つかもしれないと思ってしまう。そして、自分自身を主ご自身に献げるのを二の次、三の次にしてしまうことがあるのです。その時点で、キリストの香りではなく、自分自身の香りがその人に放っていることに気づかずに。

例えば、教会に献金を多くして、それで神さまを愛そうと思っている事業家の人がいるとします。その事業のために、肝心の礼拝に自分自身を持ってくることを怠るとします。献金としては教会に物理的な金銭は来るかもしれませんが、神への献げ物ではなく、自分の罪滅ぼしであるかのように、お金を寄進することで神に喜ばそうとする、信仰の歩み、神の恵みとは異なってしまいます。結婚をしようと思っている若い女の子が、未信者の彼氏が出来ました。彼が救われてほしいと思って、その付き合いを深くします。相手が自分の体を欲します。それで、結婚していないのにそういった関係に入ります。教会から遠ざかります。これも、自分自身を主に持って来ていないので、その相手の男性に支配されていってしまったという、主がエバに語られた、女に対する呪いを被ってしまいます。

主に自分自身を献げることによって、初めてキリストの香りを放ちます。そして、その香りは、自分自身が死んでいく中で、キリストのいのちが自分から見えてくることによって、放たれます。自分は、惨めな思いになっているかもしれない。不安や恐れ、肉体の弱さがあるかもしれない。それでも、主に命じられていることを行うのです。神に従順になるのです。そうした中で、たとえ自分は敗北者に見えようとも、キリストの凱旋の行列に連なっているのです。